

研 修 機 関	社会福祉法人長寿会 特別養護老人ホーム 第二長寿園
研 修 期 間	平成16年10月1日～11月30日
所 属 ・ 氏 名	内浦町立松波小学校 前田 雅彦

I 研修目的

- ・学校現場を離れ、社会福祉施設で働くことにより、社会的な視野を広げる。
- ・人間理解を深め、今後の教育活動に生かす。

II 研修内容

1 特別養護老人ホームにて (10月1日～15日、25日～11月5日、11月29、30日)

①介助

移動介助、食事介助、入浴介助、衣服着脱介助、衛生介助、身辺介助、洗面介助、排泄介助の補助

②作業

食事配膳、下膳、洗濯物整理、清掃、クラブ活動の会場準備

③交流

話し相手

④支援

習字クラブ、音楽教室、誕生会、ちぎり絵製作

2 デイサービスにて (10月18日～10月22日、11月8日～11月12日)

①介助

移動介助、食事介助、入浴介助、衣服着脱介助、衛生介助、身辺介助の補助

②作業

食事配膳、下膳、洗濯物整理、清掃、利用者送迎、配食サービス

③交流

話し相手

④支援

レクリエーション (歌、手足の運動、ゲーム)

3 グループホームにて (11月15日～11月19日、11月22日～11月26日)

①介助

移動介助、入浴介助、衣服着脱介助、衛生介助、身辺介助の補助

②作業

食事配膳、下膳、洗濯物整理、清掃、利用者送迎

③交流

話し相手、レクリエーション (風船バレー)、散歩

④支援

調理、農作業

Ⅲ 研修成果

「ありがとう」と言われて

この研修で、一番心に残った言葉は「ありがとう」である。介助や支援を行ったときに、利用者から「ありがとう」を言ってもらえるときがある。自分はへたくそな介助や支援しかできなかったが、それでも何度も耳にした。「ありがとう」は自分の心を温かくし、介護をする満足感のような、充実感のようなものを与えてくれた。職員の皆さんも感じていることに違いない。

第二長寿園では、食事介助、排泄介助、衛生介助、入浴介助等さまざまな介助や仕事がある。人間が生きていくうえでの身の回りのことは多数にあるからである。ある程度は予想していたが大変な仕事であると思った。夕方4時に体温が37度以上あった利用者には、翌日の朝7時までに5回検温する。体温によってアイスノンや氷枕をする。夜のナースコールは頻繁である。「トイレに行きたい」「寒い」「電気を消して欲しい」「さびしいので話し相手をして欲しい」「～が痛い」などたくさんある。このような利用者の訴えに対して、職員はきめ細かに対応をしている。定期的に行う排泄誘導、おむつ交換、痰の吸入もある。さらに尿失禁、便失禁、シーツ交換などもある。それらが毎日毎日続いていく。これらの仕事を職員は明るく何気なく行っている。

「上手やがいね」が人を傷つける（言葉の心）

利用者に一度怒られたことがある。入浴の際の衣服の着脱介助の時である。できることは本人にやってもらおうと思い、介助せずに見ていた。服が脱げたとき「上手やがいね」と褒めた。自分としては褒めたつもりであった。しかしその人は怒り出した。瞬間なぜ怒ったのかわからなかったが、自分の言葉が利用者を侮辱したことになったのだと後でわかった。相手を見下している言葉だったと反省した。

デイサービスでの入浴介助では、湯船に入っている時間が長くなりすぎて、利用者が体力を使い過ぎてしまうことがあるらしい。湯船から上がってもらったとき「～さん上がらし」「長く入ったらのぼせるよ」ではいけないと教えていただいた。自分が湯船まで迎えに行ったり、「～さんそろそろ上がるうか」と声をかけるのがいいそうだ。利用者のことを考えた発言や指示の重要性を感じた。

笑顔とべっぴんさんにご苦労様

第二長寿園の職員は明るく笑顔がいい。老人福祉だからこそ、大変な仕事だからこそかもしれない。「～（住所）のべっぴんさん（男前）」「べっぴんさん（男前）になったねえ」と職員が利用者にいやみなくさらっと使う。また職員が出会うと「ご苦労様です」の声が生まれる。どちらもちょっとした言葉かけが相手の心を楽しませたり、和ませたりしている。学校ではどうだろう。子どもたちはどんな言葉かけを待っているのだろうか。

「そこに座って、お年寄りさんと一緒に話でもしてください。」

第二長寿園に少し慣れたグループホーム初出勤のときである。張り切って「何をしたらいいですか？」と尋ねたら、こんな答えが返ってきた。

後の研修で知ったが、グループホームは「お年寄りと一緒に暮らす」のが原点なのだそうだ。そして痴呆（認知症）ケアの切り札でもあるそうだ。忘れることが多い痴呆の人にとって役割があると自己の存在価値を感じやすい。そのためには少人数である必要があるそうだ。学級経営と似ていると思った。学級でも児童一人一人に自己存在感を持たせることが重要になってくるからである。

グループホームでは、話をしたり、新聞を解説しながら読んだり、風船バレーをしたり、料理を一緒に作ったりした。家と同じように利用者も職員もリラックスして生活を共にすることを学ばせていただいた。「さあ、～してあげるぞ」ではないということである。またお年寄りと一緒にいると、不思議と心が穏やかになり、自分が逆に助けられているような気がした。

IV 今後の課題

教師としての自覚

第二長寿園では教諭は一人だけであった。自分が先生であることを意識することも多かった。高齢者の方で、「先生様」「先生様にこんなことしてもろて気の毒な・・・」とおっしゃる利用者に出会った。自分は人生の先輩から「先生様」と呼ばれる資格があるのだろうか？それほどの教育をしてきたのだろうか？と自問自答した。・・・。

当たり前であるが、子どもたちに教科書をわかりやすく教えるだけではいけない。人生の先輩として知識だけでなく生きることのすばらしさ、命の大切さを伝えたい。そんな教師になりたいと実感した。その時必要になってくるのは人生経験ではないのか。

お年寄りを大切にしないといけないと言うのはもちろんだが、お年寄りと付き合うとこんないい事がある。介護は大変だけど、「ありがとう」って言ってもらえるととってもうれしんだよ。子どもたちに自分の体験をもとにして話すことができる大きな楽しみを第二長寿園からいただいた。と同時に今の自分は先生としていいのだろうか、周りから尊敬に値する先生なのか、なろうとしているのかを絶えず問いかけ、自己を研鑽していく必要を実感した。

最後になりましたが、この研修にあたり、園長さんをはじめ職員の方々、利用者みなさん、そして、研修に出ることを支えてくださった方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。